

「多く赦された者」

ルカの福音書 7:39～50

1. 心の中で

ルカの福音書【新改訳 2017】

7:39 イエスを招いたパリサイ人はこれを見て、「この人がもし預言者だったら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知っているはずだ。この女は罪深いのだから」と心の中で思っていた。

7:40 するとイエスは彼に向かって、「シモン、あなたに言いたいことがあります」と言われた。シモンは、「先生、お話しください」と言った。

今日の箇所は前回からの続きです。シモンという名の一人のパリサイ人がイエシュアを食事に招きました。そこへ一人の「罪深い」女が香油の入った壺を持って入って来て、イエシュアの後ろからその足もとに近づき、涙で足を濡らし、自分の髪でぬぐい、さらに足に口づけして香油を注ぎました。そのようにされるがままのイエシュアを見ながら、ここでシモンは「この人がもし預言者だったら…」とつぶやいています。つまり彼はイエシュアは預言者ではないと判断し、見下したのです。考えてみればこの女が家に入って来た時点で、シモンはこれを制止し、追い出すこともできたはずですが。しかし彼はあえてこれを静観し、そうしてイエシュアを試したのです。ユダヤ人の思想は宗教的な聖さを重んじ、汚れ（穢れ）を極端に嫌います。かつて預言者イザヤは言いました。

イザヤ書【新改訳 2017】

52:11 去れ、去れ。そこから出て行け。汚れたものに触れてはならない。その中から出て行き、身を清めよ。【主】の器を運ぶ者たちよ。

シモンはこの「汚れたもの」と見て取れる「罪深い」女に触れられてもなお平然としているイエシュアを見て、この人はイザヤの言う「主の器を運ぶ者」つまり主から遣わされた者ではない、メシアどころか預言者ですらないと考えたのです。そして実際にイエシュアを自分たちと同じただの「先生」ラビ(רַבִּי)と呼んだのです。もちろんこれは大きな間違い、誤解なのですが、ここに一つの「型」があります。それはパリサイ人シモンがこの女を「罪深い」者と呼び、イエシュアが神から遣わされた御方であることを否定しているこの様子の中に、今日もなお続くユダヤ人たちのイエシュアに対する誤解、そして教会に対する敵視、蔑視の現実が表されているのです。ユダヤ人たちは新約聖書を聖典として認めないどころかこれを悪魔の本と呼び、「イエス・キリストを十字架に掛けて殺した自分たちの祖先を誇りに思う」と今もなお叫んでいるのです。そして、そのような「型」を表すパリサイ人シモンに対し、イエシュアは一つのたとえを話し始められます。

2. デナリ

ルカの福音書【新改訳 2017】

7:41 「ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一人は五百デナリ、もう一人は五十デナリ。

7:42 彼らは返すことができなかったので、金貸しは二人とも借金を帳消しにしてやった。それでは、二人のうちのどちらが、金貸しをより多く愛するようになるでしょうか。」

7:43 シモンが「より多くを帳消しにもらったほうだと思います」と答えると、イエスは「あなたの判断は正しい」と言われた。

このたとえとイエシュアの問い、そしてシモンの答えについての記述を読んで、皆さんは何を思われますか？きっとこれを自分自身に、あるいは人に当てはめ、自分は、あの人は多くの罪を赦された者だ、いや自分には、あの人には神に対する愛が足りない、だから少なく赦された者かもしれない…などと自問自答を繰り返すことでしょう。私もかつてはそのようにしてこの箇所を解釈していました。しかしここには素晴らしい良い知らせが、神の国の福音が指し示されているのです。

このたとえの解き明かしはこうです。まず「ある金貸し」とは神であられる主でありイエシュアを表しています。そして借金をしていた「二人の人」とはユダヤ人とも呼ばれるイスラエルの民と、私たち教会です。そしてここに用いられている「デナリ」という通貨は、聖書において一日分あたりの給料として捉えられている値です。給料とは人が遊んで楽をして得られるものではなく、労苦して、苦しんで後に与えられる、いわば苦しみの代償、労苦した証し、人の受ける苦しみを表すものです。つまりこの「デナリ」とは人が受ける苦しみの日を表しているのです。そしてここで「帳消しに」するという意味で使われているヘブル語はパーラ(פְּרָא)といい、その本来の意味は、「奴隷の労苦から離す、解放する。(出 5:4)」という意味を持った言葉なのです。ですからここには多くの苦しみの日を「帳消し」免れた者、多くの労苦から解き放たれた者と、逆にそれが少ない者とが表されており、罪深い女にたとえられた私たち教会は、その多くの苦しみの日を免れる者であり、一方ユダヤ人はそれが少ない者としてここに指し示されているということです。皆さんも日々様々な労苦、苦しみを味わっておられることとは思いますが、やがて世の終わりには、「大患難時代」と呼ばれる、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難が来ます。イエシュアによってまさにこう預言されています。

マタイの福音書【新改訳 2017】

24:21 そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難があるからです。

24:22 もしその日数が少なくされないなら、一人も救われません。しかし、選ばれた者たちのために、その日数は少なくされます。

私たち教会は、この多くの苦しみの日「大きな苦難」を帳消し、免れる者たち、すなわち「その日数は少なくされ」る「選ばれた者たち」であることがこのイエシュアのたとえには指し示されているのです。皆さんの今の苦しきは、この「大きな苦難」に比べれば、非常に少ないもの、小さなものなのだということをぜひ覚えてください。そしてイエシュアのこの「帳消し」は、イエシュアの空中再臨による携挙によって成就、実現します。こう預言されているとおりです。

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、
4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

このようにして私たち教会はユダヤ人たちよりも多くの苦しみの日から解放され、「多く愛するようになる」多くイエシュアを愛する「日」が与えられます。まさにこう歌われているとおりです。

詩篇【新改訳 2017】

84:10 まことにあなたの大庭にいる一日は千日にまさります。

このように、イエシュアのたとえには携挙される教会と、大患難を通るイスラエルに対する神のご計画が指し示されているのです。しかしここで注意していただきたいことがあります。「五百デナリ…五十デナリ」という金額の大小に上下や優劣はありません。イエシュアはこの箇所以外にもお金を扱ったたとえを話されていますので見てください。

マタイ【新改訳 2017】

25:14 天の御国は、旅に出るにあたり、自分のしもべたちを呼んで財産を預ける人のようです。
25:15 彼はそれぞれその能力に応じて、一人には五タラント、一人には二タラント、もう一人には一タラントを渡して旅に出かけた。するとすぐに、
25:16 五タラント預かった者は出て行って、それで商売をし、ほかに五タラントをもうけた。
25:17 同じように、二タラント預かった者もほかに二タラントをもうけた。
25:19 さて、かなり時がたってから、しもべたちの主人が帰って来て彼らと清算をした。
25:20 すると、五タラント預かった者が進み出て、もう五タラントを差し出して言った。『ご主人様。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください、私はほかに五タラントをもうけました。』
25:21 主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』
25:22 二タラントの者も進み出て言った。『ご主人様。私に二タラント預けてくださいましたが、ご覧ください、ほかに二タラントをもうけました。』
25:23 主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』

このように主人が多くの金額をもうけたしもべにも、それよりも少ない金額をもうけた者にも全く同じ評価を与えているように、「五百デナリ」の者と「五十デナリ」の者にも区別はあっても優劣はありません。それよりもむしろこの二つの金額、数を合わせて「五百五十」とすると、イスラエルの王に仕え、国を建て上げるしもべの長たちの姿が浮かび上がってくるのです。

I 列王記【新改訳 2017】

9:22 しかし、ソロモンはイスラエル人を奴隷にはしなかった。彼らは戦士であり、彼の家来であり、隊長であり、補佐官であり、戦車隊や騎兵隊の長だったからである。

9:23 ソロモンには工事の監督をする長が五百五十人いて、工事に携わる民を指揮していた。

イスラエルの王ダビデの子ソロモン、彼によって立てられ用いられた「五百五十人」の「長」たちがいました。旧新約聖書全体でこの「五百五十」という数が用いられているのはこの一箇所のみです。ですからイエシュアは明らかにこの事実をもってこの数を用い、それをたとえの中に組み込まれたのです。五百五十デナリの借金返済が帳消しにされたということは、それだけの額のお金が無条件で与えられたということでもあり、またデナリは労働、すなわち仕事、働きをも意味します。しかしその仕事、役職は「イスラエル人を奴隷にはしなかった」とあるように奴隷としての働きではありません。つまり「五百デナリ」の者と「五十デナリ」の者、私たち教会もイスラエルとともに「神の国」の王であるイエシュアに任命された、選ばれた御国の「長」たちとなる、用いられるということです。そのような神のご計画についての福音がシモンに対して語られたイエシュアのたとえには表されている、秘められているのです。

ではここでソロモンのもとでその都の建設、国造りを指揮したこの「五百五十人」の「長」たちから、私たちがやがて「神の国」においてどのような働きをすることになるのかを想像してみましょう…。

3. この人を見ましたか

ルカの福音書【新改訳 2017】

7:44 それから彼女の方を向き、シモンに言われた。「この人を見ましたか。わたしがあなたの家に入って来たとき、あなたは足を洗う水をくれなかったが、彼女は涙でわたしの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐってくれました。

7:45 あなたは口づけしてくれなかったが、彼女は、わたしが入って来たときから、わたしの足に口づけしてやめませんでした。

7:46 あなたはわたしの頭にオリーブ油を塗ってくれなかったが、彼女は、わたしの足に香油を塗ってくれました。

前回は状況説明、起こった事実としての罪深い女の記述でしたが、ここで再度、今度はイエシュアの語られた御言葉として彼女の行為が記されています。イエシュアは「この人を見ましたか」と言われ、この女のしたこの行為を見ること、そこに秘められた福音を、神のご計画を見ることを強く勧められるのです。ですからここで前回の解き明かしをもう一度述べる必要があります。

彼女は「涙でわたし（イエシュア）の足をぬらし」ました。足を洗うことは来客をもてなす一つの行為ですが、それはあくまでも当時の社会常識としての理解でしかありません。聖書には常に出来事の裏に秘められた事実、奥義が存在します。ヘブル語でこの「足」のことをレゲル(לֶגֶל)といいます。この最初の言及を見てください。

創世記【新改訳 2017】

8:9 鳩は、その足を休める場所を見つけられなかったので、箱舟の彼のもとに帰って来た。

8:10 それからさらに七日待って、再び鳩を箱舟から放った。

8:11 鳩は夕方になって、彼のもとに帰って来た。すると見よ、取ったばかりのオリーブの若葉がそのくちばしにあるではないか。それで、ノアは水が地の上から引いたのを知った。

8:12 さらに、もう七日待って、彼は鳩を放った。鳩はもう彼のところに戻って来なかった。

これはノアの箱舟の物語の一場面ですが、ノアのもとから一羽の鳩が「足を休める場所」を求めて放たれたことが記されており、ここに聖書で最初のレゲルがあります。鳩は一度目は「足を休める場所」を見つけられずノアのもとに帰って来ました。実はこの出来事は初臨のイエシュアの「型」となっているのです。イエシュアは当時のイスラエルの中にご自分がメシアとして迎え入れられる場所を見つけることができず、復活の後、鳩がノアの箱舟に戻ったように、天の御父のみもとに帰って、上って行かれました。そして次に放たれた鳩は、オリーブの若葉をくわえて帰って来たことあり、これは教会の携挙の「型」なのです。やがてイエシュアは私たち教会を若葉のように、永遠の肉体によみがえらせて天に引き上げてくださいます。そして最後に放たれた鳩は「もう彼のところに戻って来なかった」とあり、これは地上再臨されるイエシュアの「型」です。イエシュアはこの地に新しい世、「神の国」を建てられ、もう天に帰られることなくそこに住まわれるからです。このように、地上のすべての生き物を滅ぼした大洪水、それが過ぎ去り、再び現れる地、新しい地に「足を休める場所」を求めること、それはすなわち、世の終わりに地上に再び遣わされる、再臨されるイエシュアが求めておられ、ご自身によってこの地に建てられる「神の国」を指し示しているのです。実際に女性がイエシュアに近づいた時、イエシュアは食事の席に着かれ（当時のユダヤ人は身を横たえて食べる）、その足は立っても歩いてもおらず、まさにこの時イエシュアの足は休んでいる状態にあったということもこの事実を裏付けています。このように、ここに示されたイエシュアの「足」とは、イエシュアが天から遣わされ、来られること、イエシュアの再臨の事実を指し示しているのです。そのような意味をもったイエシュアの「足」を女性は「涙でぬらし」ました。述べたように、ただ足を洗うためだけならば、たらいに水を入れて持ってくれば良かったはずですが。なぜ「涙」だったのでしょうか。それはヘブル語で「涙」をディムアー(הַמָּדָה)、また「泣く」ことをダーム(נָדָה)といい、どちらにも「血」という意味のダーム(דָּם)が含まれているからです。涙とは血液から赤い色（ヘモグロビン）などを抜いた血漿（けっしょう）といわれる透明な液体からできています。ですから実際に涙のもととは血液、血なのです。つまり彼女はイエシュアの足をダーム「血」で染めたのです。イエシュアの足は再臨を表していると述べました。さらにそれが血に染まっている、この状態が指し示すものは以下の預言です。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

19:11 また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている方は「確かで真実な方」と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる。

19:12 その目は燃える炎のようであり、その頭には多くの王冠があり、ご自分のほかはだれも知らない名が記されていた。

19:13 その方は血に染まった衣をまとい、その名は「神のことば」と呼ばれていた。

この預言は終わりの日、黙示録の獣、反キリストとその勢力を、イスラエルに敵対するすべての者と「戦いをされる」ために、天の軍勢を率いて地上再臨されるイエシュアについてのものです。その御姿は「血に染まった衣をまとい」とあり、イエシュアの足を濡らした涙の意味がここにあるのです。

さらにこの女性は涙で濡らしたイエシュアの足を「髪の毛で」ぬぐいました。つまり彼女の長い髪の毛でイエシュアの足を覆ったのです。ヘブル語の「毛、髪の毛」のことをセーアール(רֶשֶׁת)と言い、それは本来、赤い毛衣のような姿で生まれたイサクの子エサウ(創世記 25:25)、後にエドム「赤い」(創世記 25:30)と呼ばれた人物を指し示した言葉であり、これもまたイエシュアの地上再臨の事実を指し示した預言に結びつきます。

イザヤ書 63:1【新改訳 2017】

「エドムから来るこの方はだれだろう。ボツラから深紅の衣を着て来る方は。その装いには威光があり、大いなる力をもって進んで来る。」「わたしは正義をもって語り、救いをもたらす大いなる者。」

このように、女性がイエシュアに対して行った行為には、見事なまでにイエシュアの地上再臨の事実が指し示されている、秘められているのです。

さらに彼女はイエシュアの足に「口づけして…香油を塗って」ともあります。「口づけする」という意味のナーシャク(נִשְׁקָה)の最初の言及を見てみましょう。

創世記【新改訳 2017】

27:26 父イサクはヤコブに、「近づいて私に口づけしてくれ、わが子よ」と言ったので、

27:27 ヤコブは近づいて、彼に口づけした。イサクはヤコブの衣の香りを嗅ぎ、彼を祝福して言った。「ああ、わが子の香り。【主】が祝福された野の香りのようだ。

27:29 諸国の民がおまえに仕え、もろもろの国民がおまえを伏し拝むように。おまえは兄弟たちの主となり、おまえの母の子がおまえを伏し拝むように。おまえを呪う者がのろわれ、おまえを祝福する者が祝福されるように。」

このように「口づけ」ナーシャクは本来、ヤコブすなわちイスラエルに対する神の祝福を指し示しており、これは本来、イスラエルの父祖アブラハムに対して約束されたものです(創世記 12:2~3)。イスラエルの民を祝福し、イスラエルを中心にして統治される、新しい世界、主イエシュアがこの地上にお建てになる「神の国」の姿が、イエシュアの足に「口づけし」た女性の姿に「型」として表されているのです。

そして女性はイエシュアの足に「香油を塗」りました。ここに使われている「(香油を)注ぐ」という意味のナーサフ(נִשְׂפָה)についても見てみましょう。最初の言及は以下のものです。

創世記【新改訳 2017】

28:13 そして、見よ、【主】がその上に立って、こう言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、【主】である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地すべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

28:18 翌朝早く、ヤコブは自分が枕にした石を取り、それを立てて石の柱とし、柱の頭に油を注いだ。

28:19 そしてその場所の名をベテルと呼んだ。

このように、「**油を注いだ**」と訳されるナーサフの本来の意味も「**口づけ**」ナーシャクと同様の事実を指し示しており、神である主がアブラハムの子孫、イスラエルの民を「**ベテル**」すなわち「神の家、神の国」の民として選んでおられ、彼らを通してこの「**地のすべての部族**」全人類を祝福しようというご計画の内実を繰り返し強調しておられることがわかります。そしてそれらの計画の全てがイエシュアの足、すなわちイエシュアが足を休める、足を置く、住まう場所を求めてこの地に来られる、まさに足を運ばれること、イエシュアの地上再臨によって成就、実現、完成することがこの「**罪深い女**」と呼ばれた「**この人**」の行動の一部始終には表されて、いや神の国の奥義として秘められているのです。

4. 安心して行きなさい

ルカの福音書【新改訳 2017】

7:47 ですから、わたしはあなたに言います。この人は多くの罪を赦されています。彼女は多く愛したのですから。赦されることの少ない者は、愛することも少ないのです。」

7:48 そして彼女に、「あなたの罪は赦されています」と言われた。

7:49 すると、ともに食卓に着いていた人たちは、自分たちの間で言い始めた。「罪を赦すことさえするこの人は、いったいだれなのか。」

7:50 イエスは彼女に言われた。「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。」

彼女の「**多くの罪**」が赦され、イエシュアを「**多く愛した**」というこの事実は、教会の携拳を指し示す「型」であると述べました。そして彼女に対し、最後にイエシュアはこう言われました。「**安心して行きなさい**」と。これはヘブル語直訳では「安心の**方**に向かって歩いて行きなさい」とも訳せません。イエシュアが私たちに与えてくださる安心、平安、ヘブル語のシャーローム(רוחם)は、この世にはありません。こう言われているとおりです。

ヨハネの福音書【新改訳 2017】

14:27 わたしはあなたがたに平安を残します。**わたしの平安を与えます**。わたしは、世が与えるのと同じようには与えません。あなたがたは心を騒がせてはなりません。ひるんではなりません。

14:28 『わたしは去って行くが、**あなたがたのところに戻って来る**』と**わたしが言った**のを、あなたがたは聞きました。

この二節はパラレリズム、言い換えによる強調表現です。このようにイエシュアの与えられる「**安心**」「**平安**」はイエシュアがわたしたちのところに「**戻って来る**」ことによるのみ与えられるのです。私たちはその日、その時に向かって歩いて行く者とされているのです。イエシュアの空中再臨、教会の携拳、これが私たちの上に救いが成就、実現、完成、完了する日です。私たちは今、その事実に向かって歩いているのです。使徒パウロはいつもこの携拳の事実をもって互いに励まし合いなさいと勧めています（Iテサロニケ4:18）。これからともに、ひたすらに主イエシュアによって携拳される日を待ち望みつつ歩んでまいりましょう。